

特117

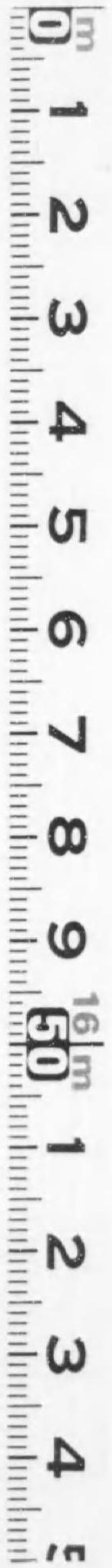
64

大正十三年五月自二日至四日（於本館階上）

上野公園
御下賜記念
圖書展覽會陳列品目錄

帝國圖書館

77600023



始



特117
64

一 上野下谷邊圖 嘉永六年刊

御成道より 山下附近の當時の 有様を見るべき圖なり

一枚

二 東叡山古圖 元祿中刊

柳亭の舊藏にて 元祿初期の刊行ならん 黒門口の田村權右衛門とは 山代官の名なり 權右衛門住宅の上は 林大學頭の舊宅にて 聖堂は 今の彰義隊の墓の邊に在りしが 元祿四年に湯島へ移り 同十一年に 林家も轉居爲せしかば 此年より上野は 全部寛永寺持ちと成りぬ

一枚

三 東叡山圓頓院寛永寺圖 寫

圖は 寛永寺以下 三十六坊を細書し 兼て山内の略沿革を附記せり

一枚

四 東叡山寛永寺山内細圖 寫

第三の 寛永寺圖と對照して 各得る所多し

一枚

五 東叡山繪圖地割 寫

圖は 中堂以下の正側面圖なり 寛永寺は 比叡山延曆寺に擬ひ 江戸城の鬼門に地を相して 寛永二年慈眼大師の開基なり 當時徳川三代の家光將軍 銀五萬兩を賜ひ 諸大名にも工事を助けしめ 同年十一月工を起すといふ 夫より約六十年を経て 元祿年中伽藍漸く整備し 本朝無双の靈場と稱し、も 明治元年の兵火に罹りて 今日當年を語る者は 僅かに此圖のみなり

一枚

六 江戸名所記 淺井了道著 寛永二年 京 河野道清刊 七 卷

畫は何人の筆と知難きも 此書の刊行は 寛永寺創立より三十年に過ぎず 當初の黒門 仁王門等の面影は此に就て窺ふべし

七 江戸すゝめ 菱川師宣著並畫 純寶五年 江 鶴屋喜右衛門刊 一二 卷

師宣は 浮世繪の始祖として 其名世上に高し 輕妙の運筆と 細心の着想とは 上野の風致に千斤の重みを加へたり

八 増 江戸 咄 元祿七年 江 藤屋又右衛門刊 六 卷

此書は 貞享に刊行の 古郷歸の江戸咄の改版なり 畫中に特長なきも 不忍の池の變遷に就ては 見るべき所あり

九 繪本江戸みやげ 西村重長畫 寛保中刊 三 卷

西村重長は 鳥居派の浮世繪師にて 仙花堂と號す 此書 上野山内の圖は 特に力を用ゐし所にて 樓堂樹木の間に 各階級の人物を描きし如きは 時代風俗を見る上にも 甚大の功ありと云ふべし

一〇 訂 江戸總鹿子新增大全 奥村玉華子編 寛延四年 江 藤木久市刊 六 卷

上野山内の案内記としては 簡便の書なり

一一 再 校 江戸砂子温故名蹟誌 菊岡沾涼編並畫 明和九年 江 藤木久市刊 六 卷

此刊行の年に 山内の仁王門燒失して 遂に再建の機なかりしと云ふ

一二 繪本吾妻遊 奇々羅金鶴撰 喜多川歌麿畫 寛政二年 江 葛屋重三郎刊 三 卷

上野山下の風光は 名家の筆に上りて 無限の興味あり

一三 東都名所一覽 北齋畫 寛政十二年 江 葛屋重三郎刊 一 卷

北齋は 斯道の巨人なり 去れど餘りに明畫の域に深入して 不忍の池の圖も 唐土の山水めきたれど 人物の動作 家屋の布置等 何人の追隨をも 許さぬものあるは 大家と云ふべきなり

一四 繪本江戸紫 歌川豊廣畫 寛政中 江 鶴屋刊 一 帖

豊廣は 豊春の門下にして 廣重の師なり 豊廣徒に俗流に浮沈するを好まず 研鑽多年 深く畫道の古實に通じ 廣く各派の短長に鑑みて 遂に浮世繪の妙所を握るに到れり 此圖 香烟の松柏を鎖せる間より 入相告ぐる鐘の聲は 餘韻猶紙上に響くの思ひあり

一五 狂 東都十二景 北溪畫 文政二年刊 一 卷

北溪は 北齋の高足なり 山王臺の秋興を 輕妙に描出した

一六 江戸名所花曆 岡山鳥編 長谷川雪且畫 四 卷

此書は 明治の再刊ながら 不忍の池の圖は巧妙なり 雪且の細評は後に出せり

一七 江戸名所圖會 齋藤月岑編 長谷川雪且畫 天保七年 江 二〇 卷

須原屋茂兵衛刊

雪且は 雪舟派の名家にて 同家累代中 傑出せるは雪且なりと云ふ 此圖會の 世評高きも 實には雪且の畫あるが故なり 殊に上野山内附近の圖は 堂塔社寺より 一木一草の末まで 悉く實境を寫出して 漏る所なし

一八繪本三都名所一覽 梅の屋鶴子撰 北溪畫 天保中刊 一 卷

清水堂より不忍辨天を眺望の邊は 師北齋の圖様に眞似たり

一九繪本江戸土産 廣重畫 嘉永慶應間 江 金幸堂刊 一〇 卷

江戸名所圖の小品物としては 此書を第一に數ふべきなり 黒門口の風情は 花に奥ある心地して 切通口の涼味は 肌に粟を生ずるの思ひありと云ふべし

二〇江都近郊名勝一覽 松亭金水撰 廣重畫 弘化四年 江 三河屋 善兵衛刊 一 卷

廣重の妙所は 墨刷に多くして 此不忍池邊の圖の如き 行人跡絶えて 山上山下満目白晝々たるは 千百言を費して 遂に云盡し難きの所なり

二一上野八景圖 寫 一 軸

住吉家の下圖なり 山内の風光は 八景のみなられど此圖は 御門跡庭中の絶勝を描けるなり。

二二上野東叡山全圖 廣重畫 萬屋刊 三 枚

天保弘化頃の 上野山内の大觀なり 正面入口は 文珠撰にて 大佛は其左に在り 中央の双堂は 右に在るが法華堂 左に在るは常行堂なり 世俗之を荷擔堂とも稱ふ 常行堂は左は鐘樓堂にて 双堂の奥は中堂なり

二三下谷御成道之圖 廣景畫 辻岡屋刊 一 枚

幕末の 勤番侍の風俗を寫せり

二四下谷廣小路之圖 廣重畫 魚榮刊 一 枚

圖中の松坂屋は 當年の繁昌を察すべく 中央の一團は 踊の師匠の花見なるべし 揃ひの日傘には春の日の影の長閑げさも見えて 一刷毛引し山上の紫雲は 太平の象を示せしならん

二五下谷廣小路之圖 廣重畫 相卜刊 一 枚

二代目の筆なり 雨を帯ひし肩上の櫻花は 半も薫る心地して風情あり

二六下谷摩利支天之圖 周延畫 魚榮刊 一 枚

明治二十六年の發行なれど 今日に比しては 風俗縮く相違せり

二七上野山下之圖 廣重畫 魚榮刊 一 枚

山下の紫蘇めしの薫りは 往來の人の足をとどめ 山上一抹の紅雲は 空も心も晴渡りて 快感限りなきの圖なり

二八諸侯上野靈廟へ參詣之圖 勝月畫 淺賀刊

故實に違ふ所は見ゆれども 猶當代を回想するの材料なり

三 枚

二九上野三橋之圖 榮之畫

榮之は 細田氏にして 十代家治將軍に仕へ 御小納戸役を勤め 五百石を食みたり 勤仕の餘暇 狩野榮川に畫法を學びて 出藍の稱ありしが 致仕後 浮世繪の畫風を好みて 能く其妙所を捉へ 地位あり 素養あり 加ふるに天分の畫才は 遂に一家の風を大成せり 其畫高尚にして 運筆に俗氣なく 版畫 肉筆兩者を兼て 浮世繪ありてよりの達人なりといふ 時に天覽の印あるは 墨田川を畫きて 後櫻町上皇の御感を蒙りしが故なり 此圖 三橋前の男女は衣裳の色彩 染模樣等 時代を寫して然も優雅を旨とせり 其左傍の貸席に 生花會の建札を配したるは 時の流行を示せるにて 其前に白扇を開ける男の 鬚先を上にあはれたるは 此頃の通人の風體なり 圖の正面は 俗に袴腰と稱へたり 左右の袖垣 前廣に奥狭く 袴の腰板に似たるよりの名なり 袴腰の正面 黒塗りの角形は 用水溜にして 火消役たる大名の交代持なり 溜の前の紋は 胡粉にて 年番大名の紋を描くといふ

三 枚

三〇上野仁王門之圖 豊春畫 西村屋刊

此圖は 浮繪にて 洋畫の式に則り 遠近法を用ひ 豊春の得意とする所なり 正面なるは 明和九年燒失前の仁王門なり

一 枚

三一上野晚鐘之圖 廣重畫 藤彦刊

三橋より 黒門口附近を眺めたる圖樣なり 正面の右手は御成門 左は通用門にて 門側の左に屋根の見ゆ

一 枚

三二上野春雪之圖 豊國畫 山甚刊

るは番屋なり 土手上の松は次第に影暗うして 往來の袖も臆氣なるに 山王臺上の 櫻花の色の愈々白きは 春の夕暮の哀れさも身に染みて 情味いと深し

三 枚

三三上野清水堂之圖 豊國畫

袴腰を場面に取りにて 春猶淺き山内の面影を 枝上の雪に描出せり 豊國の畫風又捨難き所あり

三 枚

三四見立清水之圖 豊國畫 ゑひすや刊

初代の意匠を模したる者なり

一 枚

三五上野清水堂之圖 廣重畫 魚榮刊

昔は花の見所に 清水堂附近を第一に推されたり 月の松とは 黒門内の叢林の間に在りて 其形より名附しなり

一 枚

三六上野山内月の松之圖 廣重畫 魚榮刊

入日は 向ヶ岡に落ちて 不忍池畔の燈火の晩烟に咽ふ頃 孤松空しく秀てたるも淋しけなり

一 枚

三七上野花見之圖 廣重畫 佐野喜刊

三枚

梢の花と 花下の美人とは 花より花に咲懸りたる風情にて 見る目もまげゆき心地やすらん

三八東叡山之圖 國芳畫

三枚

廣重と 覇を争ひしは國芳なり 彼此 何れも清水堂を背景として 町家の花見風俗を寫せり 廣重に 模様の好みあれば 國芳には 縞柄の趣向ありて 一長一短 兄たり難く又弟たり難しと云ふべし

三九上野の櫻狩之圖 豊國畫 山口刊

三枚

清水堂附近を描きて 前の國芳 廣重と併稱すべきものなり 三者 時代を同うして 廣重は風景に隠れ 國芳は武者繪に走り 美人併優繪を獨占せるは此二代目豊國なりといふ 其衣裳の圖案模様は 國芳と各自 特長ありて 國芳は下町向の粹を主とし 豊國の品あるは山の手向によるしといふ

四〇上野清水の櫻の圖 英泉畫 越長刊

一枚

花と云はず 人物と云はず 筆を下すは粗雑なれど 遠く望めば 畫面の奥深く見ゆるが 英泉の特長ならん

四一東叡山花さかり之圖 廣重畫 平のや刊

一枚

二代目廣重の筆にして 清水堂背後より 文珠樓を望めるの圖なり 山内には 魚鳥を忌し由にて 花見の頃は 黒門口の番屋にて 重詰を檢査し 蒲鉾のみを看過せしと云ふ 圖中につきて當時の制度をも知るべ

四二忍ヶ岡月之圖 芳年畫 秋山刊

一枚

元祿時代の面影を寫せる者にて 芳年は 明治に於る浮世繪の大家なり

四三東臺の櫻花之圖 月耕畫 松木刊

三枚

明治時代全盛期の 上野公園清水堂附近の看櫻の圖なり 今日よりすれば 之も昔と成にけり

四四秋色櫻之圖 月耕畫

一枚

秋色櫻は 大般若櫻といふが本名なり 事由は大般若轉讀の緣によれり

四五秋色櫻之圖 月耕畫

一枚

今の櫻は 何代の後なるべし 清水堂の後に在り

四六秋色之圖 國周畫

一枚

畫中の少女は秋色にて 名は阿秋 其角の門下といふ 享保十年四月十九日歿す 享年五十七 菊後亭の號あり

四七上野之圖 豊國畫

一枚

清水堂附近の圖にて 當時舞臺附近は 遊覽場所の第一に數へられて 其貸吳座 貸籠等は 山同心の内職なりしといふ

四八朝櫻之圖 月耕畫

一枚

時の鐘に 櫻を配せるの圖なり 鐘は寛文六年柏木源兵衛の建立といふ 一聲ごとに 霞の袖の綻ひ行く間より 露持つ花の色の 鶉の聲々と白み行くらん

四九 晚鐘之圖 長喜畫

一枚

長喜は 鳥山石燕門にして 榮松齋と號す 畫中の正面は 文珠樓なり 一に吉祥團とも云ふ 公辨法親王御染筆の額を掲げたり 左に見ゆるは時の鐘にて 雲深く鳥の飛ぶ低くきは 春の日足も暮近しと見えたり

五〇 上野晚鐘之圖 錦江齋畫 林庄刊

一枚

文珠堂附近を描けり

五一 上野滿花之詠之圖 廣重畫 相卜刊

一枚

鐘樓堂の圖にて 二代目の筆なり 堂は 寛永八年土居利勝の寄進する所なり 此柱卷の龍は 左甚五郎作との俗説ありて 夜々不忍の池に下り 水を飲みしかば 頭に大鉞を打しといふ

五二 上野東叡山之圖 廣重畫 喜鶴堂刊

一枚

文珠樓前の圖なり 摺も後にて 板木も疲れたれど 遠く望めば 淡烟輕くして風情あり

五三 東叡山境内之圖 廣重畫 山田屋刊

一枚

文珠樓傍より 双堂を望めるの圖なり

五四 東叡山中堂之圖 春郎畫 永壽堂刊

一枚

双堂より 中堂を見たる浮繪にして 春郎は北齋の別名なり 双堂は 右を法華堂とし釋迦を本尊とす 紀州家の建立なり 左は常行堂とし阿彌陀を本尊とす 尾州家の建立なり 何れも寛永四年の創立といふ 正而は中堂にて 本尊の薬師なるより瑠璃殿とも號す 堂宇元祿に完成して 靈元法皇の勅額を掲げたり

五五 不忍池全圖 廣重畫 葛屋吉藏刊

三枚

中の島は 寛永年中に 水谷伊勢守勝隆の 天海僧正に乞うて 不忍池中に築き 江の竹生島に擬して 辨財天を祭りしといふ 寛文の末には 陸つゞきとして參詣に便とす 其北方の小島は 辨天の舊地にて 今は地主として聖天の祠あり 此畫は 眞を寫すを主としたるも 春は水邊の柳櫻に遍くして 堤上の遊子歩を移す輕きの風致は 廣重の筆獨り之を能くす

五六 不忍池の落雁之圖 歌麿畫

一枚

池邊の少女は 世上の浮沈を解せれども 老の袖には 早く秋冷を覺えて 枯葦落雁幽懷殊に切なるべし

五七 上野時の鐘之圖 廣重畫 佐野喜刊

一枚

美人を正面に 不忍池を遠望せる 晩春の風景にして 嘉永頃下町風の 髪のかげ 衣裳つけ等を見るべし

五八 不忍辨天より東叡山を看る圖 英泉畫

一枚

何物も浮世繪中の天地なりとは 英泉の抱負なり 當時洋畫の渡來するや 此れ茶飯事のみと筆を下せるは 此圖なり

五九 落雁之圖 長喜畫

一枚

不忍池の蓮を主とせるものにて 荷葉の大に過るが如きは 遠くより見て 反つて真相を得たり
六〇 不忍池之圖 廣重畫 一枚

池邊の春色を描けるものなり
六一 不忍池之圖 廣重畫 一枚

二代目の筆にて 初代の足跡をたどるに過ぎれども 水心に宿せる山の縁は捨難し
六二 不忍辨天之圖 廣重畫 一枚

二代目なり 神妙に師の筆意を守れり
六三 不忍之池之圖 廣重畫 増銀刊 一枚

蓮花を主として 暮靄の向ヶ岡を立籠る邊 餘情殊に深し
六四 不忍池蓮花之圖 立祥畫 一枚

二代目廣重の 安藤家藤縁後の作なり 辨財天の宮居は 生氣に乏しきも 花鳥の手腕は定評あり
六五 池之端茶屋之圖 廣重畫 藤彦刊 一枚

當年の旗亭に於ける 小宴の體を見るべし
六六 池之端辨天之圖 清親畫 福田刊 一枚

清親は 明治時代の名人にて 江戸名物の名残なる東錦繪は 大正四年清親の歿すると同時に跡を絶ちたり 其洋畫を 日本の風景に融和して 現代味を漂はせたる版畫の色彩は 筆意こそ相違したれ 江戸時代の名人廣重と伎倆は伯仲の間に在りと云ふべし 此雪中の池端の如きは 同人得意の一なり

六七 池之端辨天之圖 清親畫 福田刊 一枚

此圖は 前出六十五圖と同様なれど 版畫の摺には 一枚ごとに 手加減の相違ありて 其相違する所に 多く妙味の存する者なり 對照して益する所あり

六八 池之端花火之圖 清親畫 福田刊 一枚

人物の群集には 俗臭あれど 辨天の遠見と 花火には 筆者苦心の跡を見るべし

六九 不忍池之蓮花之圖 清親畫 大平刊 一枚

人物は 缺點あるも 雨中の蓮花は 前人未發の境地なり

七〇 不忍之雪之圖 周延畫 樋口刊 三枚

衣裳 風俗等の參考に資すべき者あり

七一 上野東照宮積雪之圖 清親畫 福田刊 一枚

上野東照宮は 寛永四年藤堂高虎の建立する所なり 慶安年中 改造の命ありて 當時の名工匠 木原義助 鈴木長恒等監修 事を竣るといふ 其構造 裝飾 何れも精巧を極めて 永く權現造の模範たり 高虎の時

は 庶人に參詣爲しめんの心算なりしも 後々は之を禁止されしより 維新前は 畫人の此に筆を染めたる者なし 此圖の石の大鳥居は 酒井雅樂頭の寄進にて 上野名物の一なり

七二東照宮鳥居前之圖 清親畫 松本刊 一枚

猶洋畫の臭氣を脱しがたし

七三東照宮鳥居前之圖 清親畫 一枚

同一の畫面なれど 色彩の相違せるに注意すべし

七四五角堂之圖 清親畫 福田刊 一枚

洋風を版畫化するに 苦心時代の作なり

七五六角茶屋之圖 清親畫 福田刊 一枚

明治二十年頃の 上野の面影なり

七六動物園之圖 周延畫 森本刊 一枚

明治二十五年頃の 服装を見るべし

七七上野公園之景 清親畫 福田刊 一枚

今の博物館傍より 御靈屋前の圖なり 御靈屋は 東なるを一の靈屋と稱し 西なるを二の靈屋と稱す 三

代家光 四代家綱 十代家治 十一代家齊の靈牌は 一の靈屋 五代綱吉 八代吉宗は 二の靈屋に在りといふ

七八天王寺五重塔圖 廣重畫 一枚

二代目の筆にて 天王寺は 舊名感應寺と稱し 日蓮宗なりしを 元祿十二年天台に改宗して 寛永寺の支院となれり 比叡山の乾に鞍馬寺ありて 毘沙門天を勧請せるに擬し 傳教大師作の 毘沙門を 當時の本尊と爲すといふ 五重塔は 明和に焼失して 寛政の再建なり 明治元年彰義隊の屯營となりしより 一山兵燹に罹り 又舊觀を存する者なし

七九谷中の撫子之圖 立祥畫 一枚

谷中は舊く 撫子の名所として聞えたり

八〇下寺の椿之圖 立祥畫 一枚

山下の下寺には 椿多くして 當時は 好事者の歩を移す者多かりしといふ

八一天王寺下衣川之圖 清親畫 福田刊 一枚

螢の名所なり 圖様に筆者の苦心は見えたれども 猶成功とは稱し難し

八二江戸の花名所會 豊國、狂齋等畫 加藤清刊 三枚

明治初期の 上野山内の名所と 山下より池之端附近の名物を 當代名家の筆に 描出せるものなり

八三上野大合戦中堂場 豊國畫 石井刊

三枚

一六

八四皇月晴上野朝風 芳幾畫 福田刊

三枚

劇に見えたる上野なり 芝翫は 今の歌右衛門の先代なり 福助は 今の歌右衛門にて 左團次も先代なり 前の中堂の場と同様にて 二十三年新富座の五月狂言なり 通天中堂等 長谷川の工夫にて 日延まで爲して 大入大當りの由なり 此菊五郎は 五代目にて 天野八郎の立廻りは 尤好評なりしといふ

八五江 戸 八 景 英泉畫 山本刊

八枚

英泉の江戸八景に 上野の晚鐘あり 忍岡の暮雪あり 其他は 上野に縁あるにあらねど 割愛するに忍びずして 此に陳列せり 英泉を知らんとせば 又廣重をも知らざる可らず 廣重と 英泉は 時代を一にして 英泉の描法は 多く廣重の先驅となり 廣重の温雅なる構圖は 蕭條たる英泉の筆意に生るゝ者あり 去ば 英泉の八景に 比較する爲に 廣重の近郊八景をも 併せて出陣する事と爲しぬ 廣重の八景は後に云ふべし

英泉は 池田氏なり 俗稱善四郎 淡齋 一筆庵の諸號あり 初め狩野派の白珪に従遊し 後に浮世繪を英山に學び 又古土佐の風を慕ふ 餘伎著作に従事するも 大作あるを見ず 其畫壇に立つや 名山大川に材を取りて 猶北齋の足下に達せず 去つて 史上の人物を描くや 又國芳に及ぶなく 遂に 今様美人に筆を染めて 更に豊國の上に出難し 蓋し 英泉の數奇の運命は 幼にして 父母に別れ 轉々流離 放浪の生涯と 浮沈の一世より發足せる作品は 破壊的の氣分に充ちて 力を沈滞の擾亂に勉め 法則を嫌忌するに腐心したるより 筆々殺氣を帯びて 畫面に鬼哭の嗽々たる者あるが如き 俗眼に入難きの故なるべし

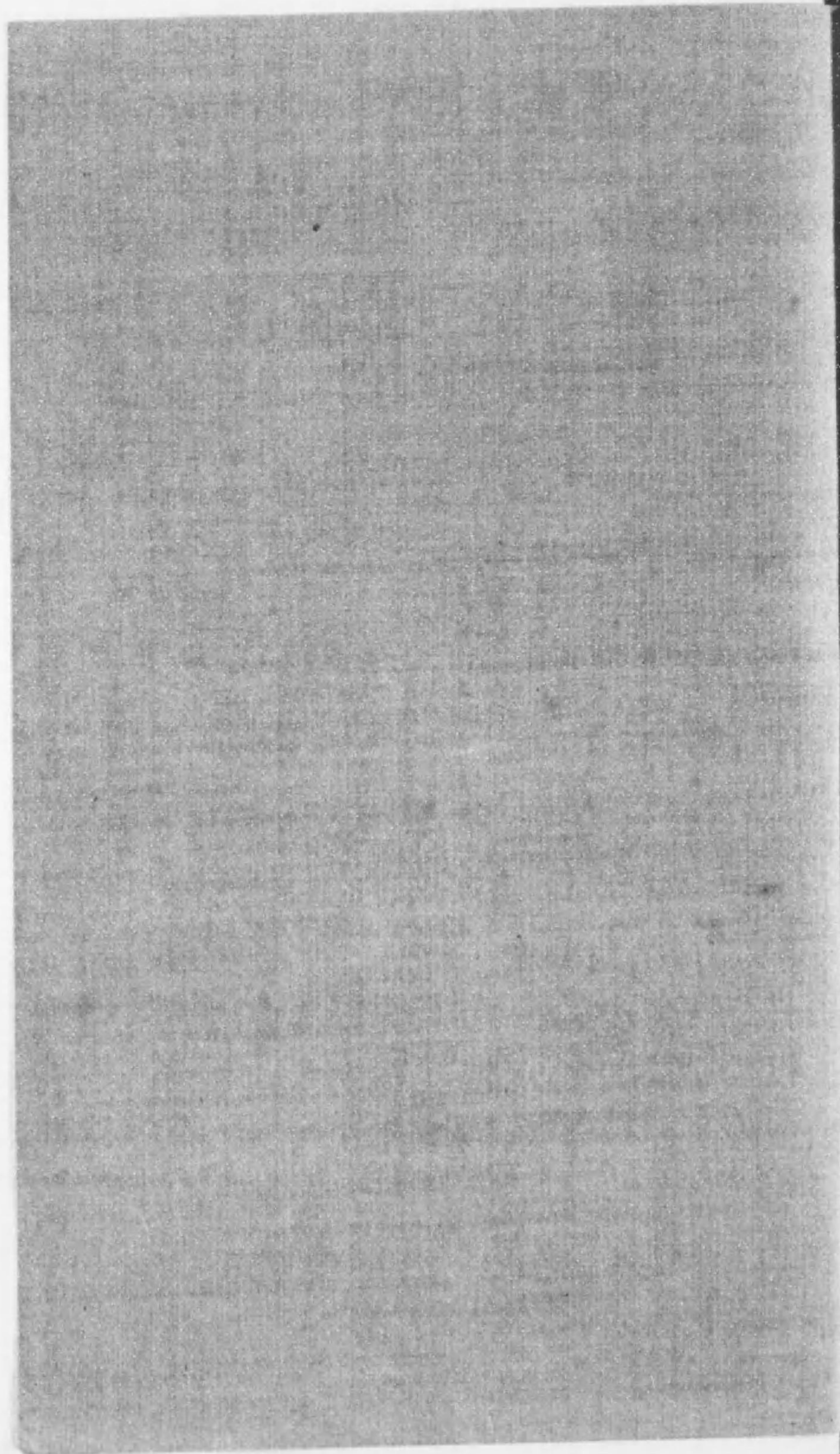
之を 村正の凄みと切味に譬ふべくして 尋常の畫家と同視すべきにあらざるなり 此八景の如きは 其傑作とは稱し難きも 上野の晚鐘は 花は昨年に似て人同じからず 吉祥閣上の暮鴉に 哀愁の切なる者あり 日本橋の晴嵐は 往來の人の面上に 世渡りの苦痛を印し 愛宕山の秋月は 浮雲に 悲痛の色あり 隅田川の落雁は 心なき身にも哀の多かるべく 土手の夜雨は 遊客を惱殺して 兩國の夕照は 逝水歸期なしの嘆あり 芝浦の歸帆は 行客の郷思漸く濃に 忍岡の暮雪は 年徒に暮るの嘆深し 其摺と彩色以外 無限の感慨は 畫にして 詩なり 看るべく 吟すべきは 此を英泉の筆にのみ 得べきか

英泉星か岡に生れ 根岸に退隱し 天保の末年 全く世を筆と捨て 嘉永元年八月二十六日歿すといふ 享年五十九なり

八六近 郊 八 景 廣重畫 喜鶴刊

八枚

廣重は 世界の巨匠なり 其傳記の如きは 世の熟知する所にして 又冗言を費すの要なし 此八景は 天保初期の製作にて 廣重の藝術が 圓熟の絶頂時代に於ける 一大傑作なり 其温雅なる色彩 謹嚴なる描線等 廣重の妙所は 全く此八景に 集注されたりといふも過言にあらず 之を英泉と對比すれば 暗夜より光明に入るが如く 秋風の落莫たるより轉じて 春風の胎蕩たるにも似たり 他を 村正の豪壯に比すべくば 之は栗田口の優雅にも勝れり 八景中 秋月最も傑れて 晴嵐 夜雨之に次ぎ 落雁 歸帆 其他何れにも妙所ありて 後人の容喙を許さず 稀世の名畫は又細評の要なかるべし



終

